



知っておきたい

# 松江市名誉市民



名誉市民章

松江市では、市民又は本市において縁故の深い方で、公共の福祉の増進や文化の進展に寄与した方を「松江市名誉市民」とし、その功績を称えています。現在24名の方にこの称号が贈られています。シリーズで一人ずつ紹介していきます。郷土の誇りとして、いつまでも私たちの心に刻んでいきたいですね。

## 第2回 平塚 運一氏 【1895~1997】



(松江市勢要覧より)

ひらつか 平塚 運一氏 (平成元年4月1日 顕彰)

松江市津田町で生まれる。石井柏亭に水彩画を学び、伊上凡骨に木版画を学んだ。昭和10年、東京美術学校に新設された版画教室で木版画を教え、昭和16年からは日本女子高等学院などでも教えた。昭和21年には松江市に松江美術工芸研究所を開設した。創作版画の普及に尽力し黒白木版画の研究制作など近代日本の版画界に大きな役割をはたし、棟方志功、畦地梅太郎ら世界的作家を育てた。

昭和37年からワシントンに活動の場を移し、黒白木版画作品は世界的にも高く評価を得た。作品に「裸婦百態シリーズ」など多数、「松江城天守閣」「松江 津田松原」など故郷をモチーフにした作品も残している。

## 文学者たちが見た松江大橋

水の都松江には、古くから多くの文学者たちが訪れ、すぐれた文学作品をたくさん残しています。松江大橋を渡り宍道湖や大橋川を眺め、何を思ったのでしょうか。

- 芥川龍之介「松江印象記」(芥川龍之介全集 第1巻)
  - 前略-松江へ着いた日の薄暮雨にぬれて光る大橋の擬宝珠を、灰色を帯びた緑の水の上に望み得た懐しさは事新しく此処に書き立てる迄もない。-後略-
- 小泉八雲 「神々の国の首都」(日本警見記上)
- 里見 淳 「或る年の初夏に」(日本の文学28)
- 島崎藤村 「山陰土産」(藤村全集 第11巻)
- 田畑修一郎「出雲・石見-松江の町」(田畑修一郎全集 第2巻)
- 石川 淳 「小林如泥」(諸国崎人伝) など



現在の松江大橋



松江市立図書館報  
 編集・発行／松江市立中央図書館  
 〒690-0017 松江市西津田六丁目5-44  
 ☎(0852)27-3220  
 2017年10月発行  
<https://www.lib-citymatsue.jp/>  
 E-mail: chuou@lib-citymatsue.jp

## 松江大橋仮橋「くの字橋」



詩  
 「くの字橋に寄す」より  
 ノッシング女史  
 松江の人々よ  
 くの字になつたあの木の橋を  
 壊さぬように御用心なさい  
 あなた方の靈魂が  
 失はれるかもわからないのです  
 (「島根の子ども文学風土記」より)

写真(『目で見る 松江・安来の100年』より)

### 内容

表紙 松江大橋仮橋「くの字橋」  
 見開き 「松江大橋」～人と人、街と街、北と南をむすぶ橋～  
 裏表紙 郷土の葉 松江市名誉市民シリーズ「平塚運一氏」  
 文学者たちが見た松江大橋

## 松江大橋の名前

橋の名前が「松江大橋」といわれるようになったのは第14代大橋（明治7年）からです。この橋の元祖といわれるのは「白潟橋」、次は竹でつくられていたため渡る時カラカラと音がすることから「カラカラ橋」（轟橋ともいわれる）と名付けられたそうです。その後、堀尾吉晴公が慶長13年に架けた橋が大橋の初代とされています。以後、2代目が架かり、3代目にあたる大橋から名前がつけられ、改架ごとに橋名も改名されていきました。橋の名が松江大橋と定まるまでは、普門院の住職によって命名されたということです。

## 絵図に残る渡り初めの様子



寛津大橋（第12代） 天保7年（1836年）改架



吉祥大橋（第13代） 嘉永7年（1854年）改架  
絵図（『松江大橋 伝説と史実』より）

## 第15代大橋（トラス橋） 明治24年3月完成

この橋は、先代の橋が優雅な姿をした太鼓橋であったのに対し、鉄柱と鉄桁で造られた鉄橋のような平橋であったため、美観にも欠け珍大橋だと市民から評判がよくなかったといわれています。しかし、明治26年の大洪水にはびくともしませんでした。



写真（『松江今昔』より）

小泉八雲は作品のなかで、「鉄柱を組んだ、白い、長い橋は、見た目にはいかにも近代的だ。」（『日本警見記 上』より）と表現しています。

# 「松江大橋」

～ 人と人、街と街、北と南をむすぶ橋 ～

水の都松江には、私たちの生活・物流などに欠かせない、北と南をつなぐ橋が架けられています。現在、宍道湖側から、宍道湖大橋・松江大橋・新大橋・くにびき大橋・縁結び大橋・中海大橋の6本になっています。その中で一番古い橋、松江大橋は何度も架けかえられ、いま私たちが渡っている橋が、堀尾吉晴公が松江城築城時に架けた橋から数えて17代目になります。昭和12年に完成し今年で80周年を迎えました。今回はこの松江大橋について紹介したいと思います。



## ぎぼし 大橋の擬宝珠

大橋に擬宝珠がつけられるようになったのは、松平家松江藩5代藩主宣維の時代からです。奥方となった岩姫が京都から嫁入りのときに持参した青銅擬宝珠を当時の第5代大橋（宝永6年改架）にとり付けられたといわれています。今の擬宝珠は、島根県出身の内藤伸（彫刻家）によりデザインされ、栄町の遠所長太郎が作製しました。第2次世界大戦時の金属供出で陶製に変えられましたが、戦後、逐次青銅製に復元されました。

## 松江大橋と人柱

松江大橋南詰めに二つの石碑があります。一つは源助柱記念碑で、堀尾吉春公が大橋を作るときに人柱として犠牲になったといわれる足軽源助を供養するもの。もう一つは昭和11年北側の橋脚工事現場で不慮の事故で亡くなった島根県土木技師、深田清さんを悼んで作られた深田技師殉難記念碑です。



左：源助柱記念碑 右：深田技師殉難記念碑

## 第16代大橋 明治44年3月完成

前のトラス橋が不評であったためか、少しでも昔の風情に戻そうと木橋になりました。



両側に歩道がつき、欄干に擬宝珠もつけられました。しかし、昭和9年3月、稲わらを積んだ発動機船が強風にあおられ中央南寄りの橋脚に激突し、橋台がくずれ落ちたため架け替えられることになりました。

写真（『島根県写真帖』より）

## 17代大橋改架中の仮橋「俗称：くの字橋」

昭和10年、橋南の魚町の湖岸から橋北の末次に向けて架けられた仮橋でした。魚町の方から見ると、ひらがなの「くの字」のように見えることから「くの字橋」ともいわれました。幅も狭く、橋脚も2本ずつで支えられた粗末な木橋でしたが、眺めもよく風情のある橋でした。

（写真は表紙参照）

## 第17代大橋 昭和12年10月完成

長さ134m、幅11.5mの鋼鉄桁橋です。外観をよくするために中央両側には展望台や春日灯籠が設けられ、擬宝珠は大きく、欄干は大橋の伝統を生かした和風で、岡山県の桜みかげ石が使用されています。この大橋の工事中には、深田技師の尊い犠牲もありました。



写真（『松江今昔』より）

### 参考にした資料

- 松江大橋物語 内田兼四郎／編著
- 島根の子ども文学風土記 島根県小中学校国語教育研究会／編著
- 目で見える松江・安来の100年 郷土出版社／発行
- 新編松江八百八町町内物語 荒木英信／編著
- 島根の伝説 島根県小中学校国語教育研究会／編著
- 松江今昔 市制施行110周年記念写真集／松江市発行
- 語りつぐ松江物語 立脇祐十／編著
- 松江文学への旅 藤岡大拙／編著
- 写真集 明治大正昭和 松江 島田成矩／編著 など